様　式　Ｆ－１９－２

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

平成　３０　年　１０　月　１１　日現在

機関番号：１３９０１
研究種目：国際共同研究加速基金（国際共同研究強化）
研究期間：2016～2017
課題番号：１５ＫＫ００４８

研究課題名（和文）危機と音楽：インドネシア・バリ島、スハルト政権崩壊後の〈聖なる音楽〉の複製（国際共同研究強化）

研究課題名（英文）Crisis and Music: The Reproduction of 'Sacred Music' after the Fall of Soeharto's Regime(Fostering Joint International Research)

研究代表者
野澤　暁子（篠田暁子）（NOZAWA, Akiko）

名古屋大学・人文学研究科・研究員

研究者番号：２０３４０５９９

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　5,600,000円
渡航期間：　　９ヶ月

研究成果の概要（和文）：本研究ではバリ島の古楽スロンディンの歴史的背景について、スラバヤ大学とミシガン大学を拠点に研究調査を行った。スラバヤ大学では芸術言語研究科教授のバンバン・スギト氏と中世ジャワ遺跡のレリーフの楽器描写を共同調査し、その成果をICTM世界大会にて研究発表および映像発表として発信した。ミシガン大学では東南アジア研究所のジャワ研究者ジュディス・ベッカー氏の協力のもとジャワ・バリ文化圏の音楽文化の歴史について研究を深め、その成果を米国民族音楽学会で研究発表した。

研究成果の概要（英文）：This project carried out the collaborative study on the historical background of the classic Balinese ensemble Selonding with two institutions: Universitas Negeri Surabaya and University of Michigan. The former activity with Prof. Bambang Sugito focused on the investigation of musical descriptions on the reliefs of Javanese medieval temples and published the results (paper and film) at the world conference of ICTM. The subsequent activity under the support by Prof. Judith Becker at University of Michigan was re-contextualizing the historical study of Javanese/Balinese musical culture, and the result was published at the conference of Society for Ethnomusicology.

研究分野：音楽人類学

キーワード：ジャワ　中世　遺跡　楽器　レリーフ

１．研究開始当初の背景

本国際共同研究は、基盤研究Ｃ採択課題「危機と音楽：スハルト政権崩壊後の〈聖なる音楽〉の複製」をマクロな歴史的視点から深化させるための比較資料の収集と分析をおこなう。渡航期間は平成 29 年度とし、前半をインドネシア国立スラバヤ大学における「東ジャワ遺跡群に残る中世ジャワ音楽文化の視覚テクストの調査」(共同研究者：芸術言語研究科、バンバン・スギト教授)、後半を米国ミシガン大学における「インドネシア音楽研究の歴史的構築の分析」(共同研究者：東南アジア研究所、ジュディス・ベッカー教授）として構成した。

２．研究の目的

本研究の目的は、第一にインドネシアの音楽史において重要な役割を果たした中世ジャワ遺跡における音楽描写の現地調査および分析を通じた図像学的音楽研究の再解釈である。この分析をふまえ、第二の目的として植民地時代より音楽学者ヤープ・クンストを中心に構築されたインドネシア音楽史の再考を設定した。以上の研究成果を国際学会（例：ユネスコ連携の国際伝統音楽評議会)で積極的に発信することにより、海外との連携による国際共同研究の基盤構築を推進し、学際的視点にもとづく新たな研究的視座の開拓をはかることが本研究の最終的な目的である。

３．研究の方法

本研究は以下３項目から構成される。

1) 東ジャワ遺跡群の視覚テクスト（レリーフ）の収集・調査

スラバヤ近郊には中世王朝文化の名残を残す遺跡群が多数存在する。なかでもマジャパヒト王国が建立したチャンディ・プナタラン遺跡の壁面には、他の遺跡と比べ圧倒的に豊富な音楽描写がみられる。特に重要なのは、鉄琴スロンディンと同形態の鍵板打楽器の描写も含まれる点である。そこで当該遺跡を中心に、中世音楽文化レリーフの資料を収集および分析するとともに、成果データを将来の学術研究に有意義な視聴覚資料として完成させる。

2) 中世・東ジャワ音楽文化の再考

上記の共同調査データを整理した上で、中世ジャワ音楽文化について再検討をする。本テーマに関しては植民地時代のオランダ人音楽学者Ｊ．クンストの研究が広く知られているが、現地の研究者からは史実との乖離を指摘する意見も多く出されている。こうした批判も含めながら、植民地時代の欧米的解釈の相対化をはかるとともに、史実および現地の認識に即した中世ジャワ音楽文化に関する再検討を行う。

3) 音楽文化をめぐる「伝統と創造」の再考

上記の二項目の調査分析をふまえ、基盤研究Ｃの課題である「危機と音楽」の観点から、音楽文化における「伝統と創造」という普遍的な問題へと収斂をはかる。バリ島におけるスロンディン復興という現在進行中の現象を中世ジャワに遡る大きな歴史的視野へ布置した上で、国際的および学際的な対話から本研究対象の個別性および普遍性を導き出すことを最終的な目標とする。

４．研究成果

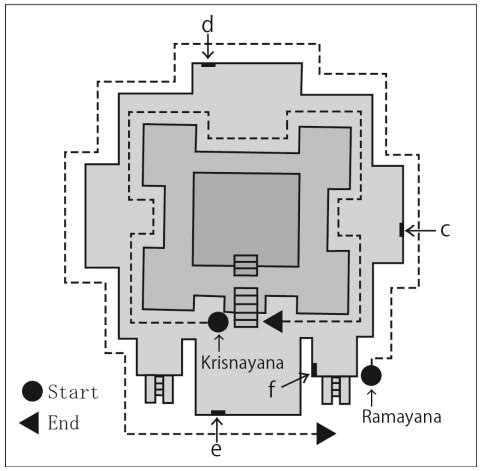
（１）中世ジャワ遺跡の楽器描写の分析

インドネシア国立スラバヤ大学を拠点とした研究活動では、東ジャワに残るヒンドゥー・ジャワ時代の寺院遺跡における浮彫壁画の楽器描写の実地調査と分析をおこなった。主な対象はマジャパヒト王国時代（12 世紀～15 世紀）に建設された、プナタラン遺跡、テゴワンギ遺跡、スラワナ遺跡、クダトン遺跡、リンビ遺跡である。同大学の考古学者ヨハネス・ハナン氏の協力が加わったことにより、考古学的知見を導入した音楽描写の再解釈へと展開するに至った。

その結果として「①〈慰霊塔〉としての遺跡の役割において、音楽描写は中世ジャワの死生観との象徴的文脈性をもつ」「②音楽描写の配置は〈儀礼行動〉と連結した遺跡の空間構造に組み込まれている」という側面を発見した。これは音楽描写を「独立的テクスト」として垂直的な音楽史構築に援用した植民地時代の音楽学者の解釈を相対化し、広義の身体性という新たな視点から解釈を深化する上で重要な意義をもつ。

特に着目したのは、考古学者 H. Santiko も言及した、プナタラン遺跡の浮彫壁画の「時計回り」と「反時計回り」からなる構造とヒンドゥー創世神話「乳海撹拌」との関係性である（写真、図）。この象徴性は聖山の象徴としての本堂を中心に「俗から聖へ」と上昇する儀礼行動として体現されたと考えられ、この文脈において浮彫壁画の楽器描写は中世の人々の神話的リアリティ形成において重要な認識論的意義を担ったと分析した。この知見を国際伝統音楽評議会の世界大会（アイルランド）で発表したところ（項目５〔学会発表〕：2）海外の研究者から大きな反響を受けたため、論文として国際学会誌へ寄稿し、査読を経て掲載決定した（項目５〔雑誌論文〕：1）。またその予備考察として国内の学術論集に投稿し、査読を経て掲載された（項目５、雑誌論文：2）。

写真：プナタラン遺跡本堂



図：本堂の壁画配置と楽器描写(c-f)

（２）空間構造を導入した視聴覚資料製作

以上の洞察にもとづき、当初計画していた「楽器描写の視覚テクスト資料のデータベース化」の質的転換をはかった。これはテクストをめぐる学術的な問いとしてきわめて重要な要素であり、浮彫壁画全体を文献史学的枠組から独立的テクストとして扱った近代人文学から脱却する上で大きな挑戦となった。具体的に本研究がまず試みたのは、前述のプナタラン遺跡の空間的象徴性にもとづく動線（すなわち儀礼的身体行動）と統合した楽器描写をめぐる映像ナラティブ制作である。その成果である「The Lord of Mountain: The Description of Musical Instruments in Candi Penataran, Eats Java」（項目５〔その他〕:1）は国際伝統音楽評議会の世界大会にて映像発表として発信され、高い評価を受けることができた（項目５、学会発表：2）。この映像ナラティブをめぐる学術的意義をふまえた上で、最終年度の後半にはテゴワンギ遺跡とスラワナ遺跡の音楽描写をテーマとした「The Song of Sritanjung: Story of Spirit Journey in Hindu-Javanese Cosmology」を完成させた（項目５〔その他〕:2）。この２作品については国立民族学博物館や東京大学図書館

など合計６機関に寄贈を行い、成果の共有化をはかった。

（３）植民地時代の音楽史研究の再文脈化

後半のミシガン大学東南アジア研究所での研究活動では、以上のインドネシアでの共同研究を通じて得た蓄積を音楽史研究の見地からさらに深化させる作業に専念した。この研究滞在では、同研究所の圧倒的な研究資料と一流のジャワ音楽研究者ジュディス・ベッカー氏からの真摯な協力が両輪となって本研究の発展に最も大きな力を与えてくれた。特にベッカー氏から勧められたのは、植民地時代にオランダ人音楽学者ヤープ・クンストを中心に構築された、インドネシア音楽史観の再文脈化である。その目的は､現代の人文学の重要な使命として、近代に確立された文化的テクストをめぐる認識的枠組のパラダイム転換をはかることにある。したがって本研究活動では植民地時代のインドネシア音楽をめぐる言説構築について、文献精読を通じて輪郭化する作業に専念した。具体的な焦点としたのは、基盤Ｃの研究対象であるバリ島の古楽スロンディンの神聖性をめぐる言説構築である。多角的な検討を重ねた上で、言説としてのスロンディンの神聖性は、植民地学者が規定した進化論的文化史観における「バリ先住民文化」という実体の曖昧な概念と複雑に絡み合っている側面を導き出した。この知見は、アメリカ民族音楽学会(Society for Ethnomusicology)のデンバー大会で研究発表として発信した（項目５〔学会発表〕：1)。

本国際共同研究は限られた期間であったものの、スロンディン再興現象という基盤研究Ｃのテーマを大きな歴史的枠組へと投げ込み、海外の研究者との議論や実地調査および文献調査といった多角的な対話を通じて多くの発展的知見を得ることができた。特にこの過程で生じた文化テクストをめぐる新たな問いは、トヨタ財団の助成研究として新規採択された研究プロジェクト(2018年5月より2年間)として発展の道を開拓した。下記の研究成果に加え、その道程で萌芽した挑戦的な課題も本研究活動の大きな成果であると考える。

５．主な発表論文等
（研究代表者は下線）

〔雑誌論文〕（計　２　件）

1. Akiko Nozawa ‘Depictions of Music Making and Theatrical Dynamism: The Reliefs of Candi Penataran in East Java, Indonesia’ in *Music in Art: International Journal for Music Iconography,* XLIII/1-2 (2018), pp. 11-26, Research Center for Music Iconography at City University of New York, Peer-Review: passed, 2018 (Now under editing)
2. 野澤暁子「プナタラン遺跡の神話的景観—山と水をめぐる浮彫壁画の象徴性より—」『名古屋大学人文学研究論集 第一号』、pp.245-268、名古屋大学大学院人文学研究科：名古屋、査読有、2018年

〔学会発表〕（計　３　件）

1. Akiko Nozawa ‘Divine Music from Ancient Bali: Gamelan *Selonding* and the Colonial Myth’ (The 62th Symposium of Society for Ethnomusicology/ Venue: Denver, USA), 10/27/2017.
2. Akiko Nozawa, Bambang Sugito, Yohanes Hanan ‘Reading Music Icons within a Theatrical Dynamism: The Reliefs of Candi Penataran in East Java, Indonesia’, The 44th ICTM World Conference (Venue: The

University of Limerick, Ireland), 7/19/2017.

3. Akiko Nozawa, Bambang Sugito, Yohanes Hanan 'The Lord of Mountain: Identifying Music Instruments in Candi Penataran, Eats Java' (film presentation), The 44th ICTM World Conference (Venue: The University of Limerick, Ireland), 7/14/2017.

〔図書〕（計　０　件）

〔産業財産権〕

○出願状況（計　０　件）

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
出願年：
国内外の別：

○取得状況（計　０　件）

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
取得年：
国内外の別：

〔その他〕（計　２　件）

1. デジタル視聴覚資料「The Lord of Mountain: Description of Music Instruments in Candi Penataran, Eats Java」, Producer: Akiko Nozawa, Director: Yohanes Hanan, Collaborator: Bambang Sugito (国立民族学博物館他へ寄贈)
2. デジタル視聴覚資料「The Song of Sritanjung: Story of Spirit Journey in Hindu-Javanese Cosmology」, Producer: Akiko Nozawa, Director: Yohanes Hanan(国立民族学博物館他へ寄贈)

６．研究組織

(1)研究代表者

野澤暁子　（NOZAWA, Akiko）
名古屋大学大学院人文学研究科
博士研究員

研究者番号：20340599

(2)研究協力者

〔主たる渡航先の主たる海外共同研究者〕

1. Bambang Sugito
スラバヤ大学（インドネシア）
芸術言語学科　教授
2. Judith Becker
ミシガン大学（アメリカ）
東南アジア研究所　教授

〔その他の研究協力者〕

1. Yohanes Hanan
スラバヤ大学（インドネシア）
歴史学科　教授